

動物観から見た人と都市

斗 鬼 正 一*

はじめに

自然は美しい、自然が大好き、自然は大事、自然を大切に、自然を守ろう。みんながそう言っている。そんなことは常識、当たり前である。

しかし、整然と区画され、作物がきちんと植えられた田畑と、いろいろな植物、雑草が勝手に生えた荒地を比べれば、整然とした田畑の方がきれいに決まっている。勝手に生えている雑草は汚い。しかしどちらが「自然」と言えば、区画を整備し、品種を選んで種をまき、灌漑し、草取りをし、手入れを怠らない田畑の方は自然どころではない。勝手に生えた雑草がてんでばらばらに生い茂っている荒地の方が、はるかに自然なはずである。しかしなぜかそうした雑草は汚いと嫌悪され、排除される。

同じように、都会の空を我が物顔に乱舞しているカラスや、家の中を這いまわるゴキブリが好きなどと言う人はおらず、嫌悪し、排除しようとする。だがカラスもトキと同じ野鳥、ゴキブリもカブトムシと同じ昆虫である。狐となると人を化かすなどと嫌悪されてきたが、他方で稲荷に祀られているし、カラスも日本サッカーの守護神ともされている。

さらに自然が大好きのはずの人は、食物として動物を食べる場合でも、山野の野鳥や獣を食べるのは気味が悪いと嫌悪し、飼育された家畜、食鳥はおいしく食べる。それにそもそも、料理しなくても食べられるものでも、そのまま食べるのは気味が悪いなどとも感じる。

私たちは、自然は美しい、自然は大事、なのに都市は自然が少ない、東京は沙漠だ、都市にもっと自然を、などと思っているはずだが、他方で実は自然を嫌悪する。そして、そんな自然のままの動物に神性を見出したりする。

本稿では、都市空間、生活空間、身体空間とかわる動物に対して、いかに矛盾した扱いをしてきたのかを検討し、それを通して見えてくる人という動物の姿を明らかにすることを目的とする。

第 I 章 都市空間に侵入する動物

1. 山野から侵入する動物

1) カラス

人はバードウォッチングを楽しみ、野鳥の減少を嘆き、「オオタカの棲む森を守ろう」などと市民運動を起こしたりするが、他方で、同じ野鳥なのにカラスとなると駆除の対象だ。ゴミを食い散らかす、子猫を襲うなど、悪行の数々が喧伝され、東京都が罠を使った駆除作戦に乗り出したのは記憶に新しい。

しかしカラスが嫌われるのは、そんな合理的理由だけではない。黒い色が不吉、鳴き声の不気味、死体に群れる墓地の鳥のイメージなどと言われ、カラス鳴きが悪ければ人が死ぬ、カラスに糞をかけられるのは不吉、などというおおよそ合理的とは言えない理由で嫌悪されている。

おまけに、カラスはあれだけたくさんいるのに死骸をほとんど見かけないのは、異次元に消え去る、自然発火して燃焼するなど、特別な方法で自ら死骸を消すからだ、などという「消えるカラス」都市伝説まで語られ、不気味さが増幅される。

2011年11月28日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 都市人類学

2) 猿

1999（平成11）年6月、港区西麻布に山猿が出現した。2か月にわたって、豪邸、億ション、大使館が並ぶ超都心の華やかな街に神出鬼没、毎日警察が追い、それをメディアが追い、果物を与えてかわいがる住民や見物人の動きを報道し続けた。麻布で見つかったというので麻美ちゃんと名づけられ、大きな話題になったが、結局捕獲され、高尾山の動物園猿山送りとなった。

ここでも注目すべきは、人に危害を加えるわけでもなく、住民にも親しまれていたにもかかわらず、そのままにはしておかず、警察、動物園関係者、そして「猿捕り名人猿田さん」まで登場して大捕り物を繰り広げ、結局動物園に収容してしまった、という点である。

3) 狸

狸はイヌ科の動物だが、近年東京都区内でもかなりの数が生息しており、世田谷などの住宅街に棲み、排水溝などを利用して移動している様子が報じられたりするが、時折都心にまで出没するとニュースとして取り上げられる。

2010（平成22年）年11月には、東京のど真ん中、千代田区大手町のオフィスビルに50～60センチの野生と判断された狸が現れ話題になった。暴れることもなく、おとなしくつかまり、都内の緑地に放されたのだが、人々を特に驚かせたのは、大手町ということに加えて、何と地下一階から慣れた様子で自動ドアを開けて入ってきたことだった（朝日新聞、2010）。

狸は江戸時代から、単に江戸の町に出没しただけでなく、狐の七化け狸の八化けと言われるように、狐よりも化け上手で、狐はたいてい女性に化けるのに対して、狸は人の他にも、物、建物、妖怪、他の動物などいろいろなものに化けた。昔話でも、茶釜に化けた狸が、痛がり、熱がり、正体がばれて逃げる「分福茶釜」、畑に侵入して捕まり、狸汁にされそうになった狸が婆を殺し、爺に食べさせてしまう「かちかち山」は有名である。

さらにはポルターガイスト騒動を起こした例もあり、1871（明治4）年、浅草寺が拡張のために

近くの雑木林と藪を開墾したところ、関係者の家で、つぶてが投げ込まれる、台所の器物が踊りだす、御膳、茶碗、御盆が這いだし踊りだす、米俵が天井へ舞い上がる、刺身50人前が台所に置いてある、といった事件が次々と起きた。火事騒ぎの際に僧正の夢に現れた狸が、棲家を荒らされ困っている。神に祀ってくればいたずらをやめ、火事も消してやると言うので、狸の御宮と御堂を作ったところ、ようやく収まったという（田中、1999）。

狸囃子は、深夜にどこからともなく腹を打つ太鼓の音が聞こえてくるという「番町七不思議」の一つで、「本所七不思議」では「馬鹿囃」と呼ばれていた。音の方向へ行ってみても、音は逃げるように遠ざかってゆき、音の正体は絶対に分からない、音を追っているうちに夜が明けると、見たこともない場所にいることに気付くなどといい、狸の仕業とされた。

明治の文明開化で鉄道が走り始めると、狸が汽車に化けて他の汽車と正面衝突し、現場には狸の死骸が残っていたという「狸列車」など、新たな怪異譚が登場している。

4) 貉

貉とはイタチ科のアナグマの別名で、体長50～90センチ。狸に似ているが、爪が長く、熊のようにかかとを地面につけて歩く哺乳類の動物である。ただし、混同して狸のことを指す場合もある。

1904（明治37）年の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）『怪談』の「むじな」は、紀伊国坂（港区）で、貉が化けたのっぺらぼうの女や蕎麦屋に出会う話であるが、明治になると、貉は汽車にも化けて線路を走っている。葛飾区亀有の常磐線では、貉の偽汽車が現れた。深夜に汽車の前方から汽笛が聞こえて汽車がこちらに向かって走って来る。急停車しても何事も起らずその汽車は消えてしまう。たびたび起るので、ある晩どうせ偽汽車だろうとそのまま走らせたところ、叫び声とともに偽汽車が消え、翌朝轢かれた貉の死体が見つかった。鉄道建設のために棲み処を追われた貉が、機関車になって人々を化かしていたのだろうと、供養のために作った見性寺の貉塚は今日も残されて

いる（田中，1999）。

このほかにも柳田国男が『たぬき』の中で、汽車に化けた貉が本物の汽車にはねられる話を記録している。

5) 狐

狐も、飼うことはないにしても、人里近くに棲む動物だが、古くから人を化かす気味の悪い動物とされる。闇夜の山野の不審な火は「狐火」、これが多数連なると「狐の嫁入り」と呼ぶなど、怪異現象と結びつけられ、あるいは、花が咲くときに葉がないヒガンバナ科のキツネノカミソリのように、奇妙な色や形をした植物の名になったりする。さらに狐は若い女性に化けるし、ヨーロッパでは逆に女性が狐に、あるいは魔女が狐に化ける話もある。

こっくりさんを「狐狗狸^{イヌ}」さんとも書くのは、狐が、狗、狸とともに人に憑いて託宣を下すからだし、稲荷神の使いとして稲荷神社に祀られてもいるように、狐は不気味な力を持つ動物と信じられてきた。

2. 水界から侵入する動物

1) アザラシ

2002（平成14）年8月、多摩川の大田区と川崎市を結ぶ丸子橋付近にアゴヒゲアザラシが出没。メディアで大きく取り上げられ、タマちゃんと名前まで付けられて、見物人が殺到した。その後、横浜市港北区の鶴見川大綱橋付近、西区の帷子川の横浜駅近くなどにも現れ、大きな話題となった。タマちゃんの動向は日々報道されて大きな関心を受け、2002年新語・流行語大賞年間大賞に選ばれた。

翌2003（平成15）年にもタマちゃんと思われるアゴヒゲアザラシが荒川のさいたま市と志木市を結ぶ秋ヶ瀬橋とJR武蔵野線荒川橋梁の中間付近に現れ、2004年まで棲みついたため、タマちゃんフィーバーが続いた。しかし4月には姿を消し、フィーバーは終息している。

それから7年後の2011（平成23）年10月、志木市の荒川の秋ヶ瀬取水堰付近に再びアザラシが

出没。タマちゃんが戻ってきたのでは、という報道もなされたが、別個体で、ゴマフアザラシと判明。それでも志木あらちゃんと名づけ、志木市が住民登録してあらちゃんグッズが売られる騒ぎが続き、会えると幸運というので見物人が押しかけた。

鶴見川も帷子川も大都市の真ん中の都市河川で水質も悪いと思われていたが、海水と真水が混じり合った汽水域で、エサのエビや魚が豊富であるため、案外生活しやすかったとされる。

2) サンマ

1963（昭和38）年6月23日には横浜港にサンマの大群が押し寄せたが、この際も、春以来の異常寒波、黒潮異変、沿岸低温異変、麦大凶作に続く何かの凶兆かもしれないという噂話が広まっている（読売新聞，1963）。

1982（昭和57）年5月2日には東京港辰巳運河、東雲運河、隅田川などにもサンマの大群が押し寄せ、2003（平成15）年には品川区の立会川、中央区の汐留川、文京区の神田川などに次々とボラの大群が現れた。こうした場合も、メディアの大騒ぎにとどまらず、大地震など天変地異の前ぶれかもしれないなどと恐れおののく人が現れている。

アゴヒゲアザラシもサンマもボラも、各地の海にいくらでもいる。ところがこれが都市に侵入すると、とたんに「立件」されてしまうというわけだ。

2) 鰐

下水道に鰐がいる、という都市伝説があった。ペットとして飼っていたのを持って余し、捨てたものの、水が温かく栄養豊富な下水道の中で巨大に成長してしまった、というのだから、有り得なくもない話である。

練馬区の石神井公園の池では、1993（平成5）年8月、実際に鰐を目撃したという人が現れた。警備員が巡回し、馬肉の罫を仕掛けた捕獲作戦が行われるなど騒然となったが、結局発見されず、棲息していたとしても冬を越せたはずはないと、

ようやく警戒態勢が解除されたのは翌年6月という大騒動だった(唐沢, 1997)。

熱帯ジャングルで捕獲して、はるばる異国の大都会に運び、水槽に閉じ込めた鱷たちの反逆、そんな野生動物のいつの間にかの侵入に対する恐怖感が、こうした都市伝説を生み出す、というわけである。

3. 異界から侵入する動物

1) 怪獣

南の島で生け捕られ、ニューヨークで見世物にされた巨猿キングコングは、女優をさらってエンパイアステートビルによじ登り、巨大都市の人々をパニックに陥れた。

東京にも、水爆実験で海底洞窟での太古の眠りから覚められたゴジラが上陸した。口から高熱放射線を吐く身長50mの怪獣は荒れ狂い、銀座、国会議事堂、テレビ塔、勝鬨橋などを次々と叩き壊し、東京は焦土と化した。最後は芹沢博士の発明したオキシジェン・デストロイヤーなる化合物で殺されるのだが、こうした怪獣は、人が排除したはずの野生の動物が、いつの間にか人が統制できない怪獣となって都市に侵入してくるのでは、という恐れを抱いているからこそ作り出された存在である。

2) 鬼

鬼とは本来靈魂とか死人の魂のことだったが、今日鬼といえば恐ろしい地獄の赤鬼、青鬼たちだ。裸で、額に角、口は横に裂けて鋭い牙が生え、残虐で人肉を貪り食う。色も日本人にとっては人の体の色とは思われていなかった赤、黒、青で、まさに猛獣のイメージである。

しかし他方で、鬼は、顔も体つきも人と似ており、言葉話し、裸といっても素裸ではなくパンツという衣服を身につけ、金棒という道具を持つなど、人に近い姿とされている。要するに人と動物の境界的存在というイメージである。

さらには、呑香童子は都と異界の境界にあたる大江山を棲み処とし、茨木童子などの鬼どもを従えては都に侵入し、悪事を働いたとされるように、

鬼は人と動物の境界を犯し、自然の支配する奥山から人の生活空間に侵入してくる、恐るべき動物たちの具現化としてイメージされている。だから、パンツを身に付けてはいても、あくまで布ではなく虎の毛皮というわけである。

3) 河童

江戸の街の水辺に出没したのは河童である。水中に人や牛馬を引き込み、人の肛門の中の架空の臓器尻子玉を抜いたり、生き血を吸ったりするといわれた。麴町の堀に棲む河童は、子どもに化けて近くを通る人を堀に引きずり込もうとしたし、飴屋十兵衛の店には子どもの姿をした河童が飴をもらいに来たという。弁慶堀では水中の子どもを助けようとした中間が逆に河童に引き込まれそうになり、生臭い臭いが4、5日とれなかった、という話がある(松浦, 1978)。

この河童も、一見動物の姿をしていて、背中には亀のような甲羅があり、鳥のようにとがたくちばしを持ち、手足に水かきがあり、ウロコに覆われている。おまけに生臭く、水にも陸にも生息するという境界的な存在だ。しかし他面では、姿形、大きさは4、5歳の人の子どもに似ており、人と動物の境界的な姿の妖怪である。

4) 半人半牛の「件」

江戸の街はおろか、第二次大戦中の東京にも出現し、警察が取り締まりを強化したというのが、人偏に牛と書く「くだん件」である。古くから日本各地で知られ、文字通り半人半牛の姿で、牛から生まれるとも人から生まれるとも言われ、人の言葉を話し、生まれて数日で死ぬが、予知能力を持ち、作物の豊凶や流行病、旱魃、戦争など重大なことに關して様々な予言をし、間違いなく当たるという。

逆に、人であるにもかかわらず、件とされた例もある。明治時代に三輪崎(和歌山県新宮市)の村外れの漁村の家で、件が檻の中で飼われていたが、実はその家に生まれた白痴の子どもで、動物のように這うだけ、体は人ながら顔は牛のようだったという。人でありながら動物のようだったこの

子が、件とされてしまったというわけである（南方, 1921）。

5) 少数民族は土蜘蛛、熊襲、毛人

実在の少数民族が、人と動物の境界的存在とされてしまった例もある。『古事記』には、神武天皇東征の際、尻尾のある人が井戸の中から岩を押し分けて現れたと書かれ、『日本書紀』『神武紀』には、「身短くして手足長し」と書かれる「土蜘蛛」が登場する。『常陸国風土記』では「普く土窟あまねを掘り置きて、常に穴に住み、人来たれば窟に入りてかくる」狼の性、梟の情を持つ人々とされていた。これが後の『土蜘蛛草紙』では、源頼光と渡辺綱が京の都の廃屋で妖怪変化と遭遇、斬りつけた血の痕をたどり、西山奥の洞窟で巨大な土蜘蛛を見つけて討ち取ったとされ、能の「土蜘蛛」では、葛城山に住み、蜘蛛の糸を繰り出す妖怪となった。

『日本書紀』神代・景行の条では、皇威に従わぬ民族を、邪鬼あしきもの、邪神あしきかみ、姦かだましき鬼と記しているが、土蜘蛛もまた、当時まだたくさんいた朝廷にまつらぬ少数民族、中には穴倉、洞窟などにも住んでいたいわゆる化外の民が、手足が異様に長い蜘蛛とか、熊、毛深い生き物といった動物同然の妖怪扱いされたというわけである。

6) 口裂け女

現代の都市伝説で最もよく知られるのは、1979（昭和54）年頃一世を風靡した口裂け女である。美人だが口が耳まで裂けており、その口を隠すためにマスクをし、手には鎌を持っているという。出会う人に「私きれい？」と問い、肯定すると「これでも？」と言ってマスクを取って追いかけてくる。否定すると、持っている鎌で襲いかかる。100mを0.5秒、3秒あるいは10秒で走り、赤い車に乗っている場合もある。鼈甲飴が好物だがポマードが苦手、襲われた場合「ポマード！」と叫ぶと逃げていく、などと言われた。

この噂に怯えた子どもたちがパニックになり、集団登校が行われたりするほどだったが、ここでも注目すべきは、目は狐、声は猫に似ていること

に加えて、何よりも口が裂けていること。つまり人の形をしながら、他方で動物の特徴も持っており、人と動物の境界的存在とされている点である。

第II章 生活空間に侵入する動物

1. ペット

1) 犬

犬は人類最良の友、長い付き合いで犬好きは多い。ところが他方で、都市空間に生息する野良犬となると、咬みつく、怖い、汚いと嫌悪の対象だ。かつて町内を棲家にしていた半野良たちも、保健所の熱心な野犬狩のおかげで排除され、現在ではペットとしての存在しか許されない。それも無駄吠えせず、糞も散らさず、放し飼いと、咬みつく犬となると猛獣扱いである。

これは理由として合理的だが、他方で、なぜか犬は侮辱、嫌悪の対象でもある。実際、犬を使つたたとえにはろくなものが無い。犬畜生と蔑まれ、権力の手先とされる警察官やスパイ、強いものに媚びへつらい尻尾を振って付いていく人のたとえに使われる。だめな侍は犬侍、夫婦喧嘩をすれば犬も食わない、拳句に無駄死にすれば犬死、崇られた家系となると犬神家の一族といった調子である。

英語でも dog はくだらない、だめな人や物、失敗作といった意味で使われ、a sly dog（ずるいやツ）、Don't be a dog!（卑怯な真似はよせ）と馬鹿にされ、lead a dog's life（惨めに暮らし）て、最後は die like a dog（惨めな死に方をする）、といった具合で散々である。

2) 猫

猫もまた人類第二の友で、文字通り猫可愛がりされている。ところが他方で、犬嫌いに比べて、猫嫌いはかなり多い。嫌猫派は、糞尿を撒き散らして臭い、庭を荒らす、飼い鳥を襲う、犬に比べて知能が低い、わがまま、身勝手、主人の言うことを聞こうとしない、人を馬鹿にした態度が気に入らない、鼠、虫などを捕まえてくるのが嫌、などと嫌う。1994（平成6）年には、ペットボトルに水を入れて並べておくと、猫が近付かない、と

いう俗説が広まり、東京中至る所にペットボトルが並べられる、などということも時々起こる。

かつては焼き魚を盗んだりするというので、ネコババ、泥棒猫、盗っ人猫、猫被りと悪口雑言も数多く浴びせられた。

これらは一応合理的な理由だが、さらに、気味が悪いといった、合理的とは言えない理由で嫌悪する人が多い。暗闇で光る目が恐ろしいといった単純なものだけでなく、死んでも9回生き返る不気味な動物とされ、西洋では黒猫が不吉の象徴で、魔女が好んで姿を変える使い魔とされ、魔女狩りで殺された。また、セックスのメタファーとされ、挑発する女、寝とられ男、といった連想を引き起こした。

日本でも、10年飼えば人の言葉を話し、14、5年もたつと化け猫になって神変をなすとか、30年生きると尻尾の先が二股に割れ、妖獣「猫又」に化けるなどと信じられていた。『徒然草』には「奥山に猫又といふものありて……」と記述があり、藤原定家の日記『明月記』にも、1233（天福1）年南都に猫又が現れて一夜に7、8人の死者が出たと記されている。老婆を食べて老婆に化けた猫又が、泥酔して正体を現し捕まったなどという話もある。

江戸時代には、主人への忠義を尽くすことが強調されたので犬は好まれたのに対し、猫はひがみ疑う心を持つ陰獣とされ、殺して三味線の皮にすれば恨んでおかしい音を出すような動物で、飼うものではないと言った。死者に猫の霊が憑くというので、葬儀では死者の枕元に刀を置く地方もあった。

そんな調子ゆえ、化け猫伝説の主人公とされたり、講談では「鍋島騒動」、「有馬の猫騒動」、映画、小説でも、「怪猫お玉が池 黒猫の玉」、「吸血鬼と怪猫殿」などと、しばしば怪談の主役に祭り上げられている。

2. 家畜

1) 豚

中世のヨーロッパでは、都市空間に豚、羊などの動物が飼われており、街路を豚の群れがのし歩

き、道路は彼らの糞尿でまみれていたという。しかし江戸、東京では、犬、猫、馬以外の家畜は都市空間から排除されていた。世田谷区などの周辺区では現在でも養豚場、養鶏場などがみられる。しかし、これらの施設は、周辺住民からは嫌悪され、存在を知った人々は奇異の目で見るのである

豚といえば代表的家畜で、農家にとっては身近な動物である。ところが、実際は結構きれいな好きなのに、いつも泥んこの中に寝転がっている汚い動物というイメージである。加えて大食いで、いつもがつがつ食べており、ぶくぶく太っているというので、食いしん坊や太った人への蔑称にも使われてしまう。「千と千尋の神隠し」でもめっちゃくちゃに食べた千尋の両親は豚になってしまった。英語でも pig は大食い、不潔な人、欲張り、頑固者、身持ちの悪い女、ブス、嫌なやつ、ポリ公、人民の敵、白人野郎という調子だし、動詞でも、大食いする、がつがつ食う、豚のように暮らす、豚のように寝るで、身近なのにイメージ最悪というのが豚である。

2) 牛

1994（平成6）年には肉牛が芝浦埠頭（港区）から逃げ出し、第一京浜国道を横断、東京タワー方面まで歩き回り、警察が出勤する「事件」があったが、特に危険があるわけでもない肉牛が、都心に存在すること自体が奇異であり、「事件」なのである。

またかつて練馬区などには乳牛を飼う牧場がいくつも存在したが、汚い、臭いと公害扱いされたり、奇異の目で見られたりと嫌悪され、現在では、23区で乳牛を飼っている牧場は、練馬区大泉学園町の1軒だけである。

3) 馬

1996（平成8）年には、大井競馬場（品川区）から逃げ出した競走馬が首都高速道路を爆走する事件が発生した。1月25日午後、大田区の首都高速道路下り線を馬が走っているのが発見され、首都高速道路公団のモニター画面に映ったのを見た職員や、ドライバーから110番通報が殺到、警

視庁高速道路交通警察隊の隊員らが追いかけたが、約 300 m のトンネルを走り抜け、約 5 分後、空港西ランプを出てきたところを警察官らがロープを張ってようやく捕まえた。

逃げたのはデビュー戦を控えて北海道の牧場から送られてきたメスの 4 歳馬「スーパーオトメ号」で、馬房を掃除するため厩舎から出したところ、バケツを弾みで飛ばしてしまい、驚いて走り出した。厩務員があわてて自転車で追いかけたものの逃げ切れ、全速力で競馬場を 3 分の 2 周した後、場外へ出て一般道を 1 km ほど走り、近くの平和島か勝島のランプから首都高速道路に迷い込んだ。下り線 2 車線のうち左側を悠々とギャロップで横浜方面へ数キロ走り、後ろから車が数台、つながるように続いていたという。

結局交通事故は起きなかったものの、このスーパーオトメ号は、「スーパーオトメ高速デビュー」「首都高爆走娘」などとメディアに取り上げられ、2 月 3 日の大井競馬場でのデビュー戦「サラ四歳未出走戦」では大人気となった。パドックに「首都高爆走娘」と横断幕が掲げられ、ファンからは「大井競馬の発展のために頑張れ」と声がかかり、単勝倍率 2.1 倍と、出走馬 11 頭のうち一番人気。入場者 3,100 人、勝馬投票券の総売り上げは約 3,170 万円で、同じ土曜日だった前年 12 月に比べ、入場者 4.3 倍、売り上げ 2.8 倍となった（朝日新聞、1996）。

第三章 ペット化、家畜化という文化

1. ペット

1) 種類

イグアナとか大蛇、豚がペットだと、ライオン、虎のように危ないわけではないにもかかわらず、変である。ペットにするべき動物は特定の種類が選ばれている。

犬は狩猟民が狩りに利用でき、鼠を獲る猫も農耕民の穀物番に好都合だからと、飼われるようになり、やがてペットに昇格しただけで、元々は数多い山野の獣である。

その鼠も、ドブネズミは駆除対象だが、ハツカ

ネズミはペットで、燕尾服に白手袋、シルクハットをかぶれば、たちどころに世界の人気者である。

つまり人は、自然界に数ある動物の中からペットにすべき動物、愛すべき動物を決めてしまい、外れた動物をペットにすると変というレッテルを貼り、排除してしまう。おまけにそれは各民族、時代が勝手に決めているから、同じ動物が一方で愛され、他方でレッテルを貼られて排除されるということになる。

2) 空間的移動と野性の剥奪

特定の種類を選んでも、自然界の生息空間にいてはペットではないから、都市、家という人の生活空間へ移動させる。

山野の動物は 1 匹ずつ識別しないが、ペットとなれば、名前を付けて識別し、鈴木ポチとか佐藤タマといった具合に、家族の一員として、人の社会に組み込む。

人の言葉を理解させ、様々な命令を聞き分け、服従することを求めるし、習性も野性のままだは許さず、獰猛で決して人になつかないはずの狼、山猫を手なずけ、ワンちゃん、ニャン子へと作り変えてしまう。むやみに吠えたり、爪を研いだりさせず、食や排泄のしつけをする。中には糞が臭くなる薬を飲ませる人もいる。ブラッシング、水浴などで体を清潔にし、首輪はもちろん、時には服を着せ、リボンを付けたり、アクセサリーで飾ったりもする。鼠、昆虫、池の鯉、金魚など本来の彼らの習性なら餌にしてしまうものを食べることを許さず、ペットフードや肉、魚など、犬、猫の餌として決めたものを、生のままではなく、ある程度の調理をし、時には人とまったく同じものを、食器を使って、時には人と同じテーブルで食べさせる。病気になるれば獣医に見せ、死ねば専門の葬祭業者まで登場する。

3) 品種

奇妙な体型にトリミングされるプードル、パンダや虎そっくりに毛を染められてしまったカラー犬など、外見を変えてしまう程度ならともかく、ボクサーなら尻尾と耳は赤ん坊の時に切って小さ

くしてしまうとか、後足の爪は4本と決め余分なのは切除してしまう。

さらに人は、その程度では気が済まず、子孫を残すという動物として最も基本的な本能による行動さえも統制してしまう。繁殖は人の都合でさせ、商売にしている人もいるし、その前に犬に結婚式をさせる飼い主もいる。

そもそも、狼から引き離されて以来の変化に加えて、品種自体が改良され、今見る犬たちの多くは人に都合の良いように作られた新種だ。短足胴長で人気のダックスフントも、小さな穴に潜り込んでアナグマを狩るのに好都合のように作られた人工品種だ。ホットドッグのような形に作られたダックスフント、さらには毛がほとんど無く、室内でしか生きられない猫のスフィンクスなど、植物で言えば盆栽のようなものなのだが、だからこそカワイイとされる。動物が好き、といっても山猫のまま、狼のままだったら、カワイクナイのである。

2. 家畜化

1) 種類

家畜は、人が生きていくうえで食料、使役などに利用できる農用動物、実験動物、愛玩動物である。新石器時代には家畜化が始まったといわれ、牛、豚、馬、鶏など、多くの家畜が登場したが、とりわけ重要なのは農用動物で、乳、肉、卵、毛、皮革、羽毛などの畜産物を生産する用畜と、労働力を提供する役畜に大別される。この場合も同様に、利用できる動物かどうかで、特定の種類が選ばれており、何の種類でも良いわけではない。

2) 空間的移動と野性の剥奪

豚は野生でも残飯を食べるなど、人に接近して共生しやすい動物であるし、牛、羊は、群れで生活するため、群れごと人が統制しやすい動物である。こうした動物たちは、山野から人里、屋敷の中に、まずは空間的に移動させる。さらに行動の自由を奪い、食もその動物の食性とは必ずしも関係なく、肥育などに好都合なものを、人の都合のよい時間に、都合の良い方法で与える。動物とし

て最も基本的な生殖も、人工授精など、人の都合によって統制される。

3) 品種改良

飼育目的に合うように品種の改良も行われ、自然淘汰圧が無いことも加わって、形態的にも野生のものとは大きく異なったものに作り変えられる。

たとえば豚の巻き尾は、骨の曲がりでなく筋肉の力で巻くものになっているし、馬や豚の顔面は、下顎骨の短縮により湾曲したものに変わっている。

他方、インド象や鶴飼に使われるウミウは、人が繁殖を統制しておらず、遺伝的にも野生のものと同じなため、家畜の範疇には入らない。

第四章 人の身体に侵入する動物

1. 野生の食材

1) 獣肉

豚肉は多くの人々が好む食材である。ところが猪肉となると、とたんに気味が悪く感じる人も多い。狐、狸、熊となるとさらにゲテモノで、カモシカとなると、食べる人はいない。

鳥類でも、鶏はごく当たり前の食材だが、鳩、カラス、トンビとなると、日本人は食材にはしないし、雷鳥となると、たとえ法律で禁止されていなくても、食べる人はいない。また同じ鴨といっても養殖鴨なら食べるが、池や川を泳いでいる野生の鴨となると大いに抵抗感がある。

豚は元々野生動物である猪を家畜化したもので、猪とは祖先、子孫の関係である。食肉用に品種改良したりして、牧場や農家の豚舎で餌を与え飼育した豚の肉はおいしい食材なのに、祖先種で野生動物である猪は気味が悪いということになる。鹿もニュージーランドでは牧場で飼育されているが、日本ではほとんどの人が野生動物としか思っていないから食べたがらず、輸入してもほとんど売れない。

つまり、人が食用、家畜として育てた動物の肉は好まれるのに、そうでない自然のままの野生動物の肉は気味が悪いゲテモノと嫌悪するというわけである。

2) 新鮮な自然食への嫌悪

刺身は日本人には最高のご馳走だが、世界の多くの民族にゲテモノ扱いされる。理由はナマだからで、煮たり焼いたりしてあれば、ゲテモノ扱いはされない。つまり加工度が極めて低いから嫌悪される。日本人も、イヌイットがカリブーの生肉を食べていたなどと聞くと、ゲテモノとってしまうのと同様である。

また、刺身が大好きな日本人でも、活け造りは嫌悪という人は多い。そしてもっと多くの人が嫌悪するのが踊り食いである。活け造りは、カットしたとはいえまだ動いているし、まして踊り食いは、白魚などの小魚をだし汁に入れてそのまま飲み込む、つまり生きたままである。究極の新鮮さ、究極の自然食のはずだが、気味が悪い、ゲテモノと嫌悪される。

飲物でも同様に、汚染されていないくても雨水を飲むのは嫌で、処理された水道水の方がきれいと感じるし、生水よりは茶、清涼飲料水の方が上品、上等な飲物と考えられたりもする。

つまりは新鮮な自然食こそ望ましいなど言いながら、人は自然のまま、野生のままのものは気味が悪いと感じ、嫌悪するのである。

2. 肉食への嫌悪

1) 肉食

よく知られているように、日本では江戸時代まで、肉食は汚らわしい、恐ろしいと、あまり食べることはなかった。

幕末になると欧米人の影響もあって、江戸庶民の肉食への嫌悪感が薄れはじめ、場末に「ももんじゃ」と称する肉食を提供する店、獣店ができた。ただし、幕末に屠殺を始めた中川屋は、屠殺場を江戸に設けようとしたものの、土地を貸してくれる者がおらず、ようやく親類の畑の一部を借り、屠牛を始めても、たちまち村が穢れると村人が騒ぎ出し、やむなく、村はずれの芦原の中に移転したほどだった。屠場でも、穢れぬようにと青竹を4本立て、それに御幣を結び、四方へ注連を張り、屠牛の後はお経をあげたという（渡辺、1988）。そんなにまで日本人は獣の肉を食べることを嫌悪

したのである。

2) 牛乳

日本に朝鮮半島から牛が入ってきたのは、弥生時代初期の紀元前2世紀ころと考えられているが、最初に牛乳を飲んだ記録は、7世紀中ごろ、中国からきた学者の子どもで帰化人の福常が、高徳天皇に牛乳を献上したのが、初めとされる。

こうして中国伝来の乳製品である蘇（酥）^そや酪^{らく}が製造され、平安末期まで宮廷で用いられた記録があるが、その後江戸中期に至るまで、牛乳や乳製品利用の記録はない。織田信長が少年時代に牛乳を飲むと本当に牛になるかどうか試すと称して飲んだというほどで、嫌悪されていたのである。

1727（享保12）年に8代将軍徳川吉宗が嶺岡（千葉県鴨川市）に牧場をつくり、インドから白牛を導入して白牛酪^{はくぎゅうらく}（牛乳に砂糖を加え鍋で煮つめて型詰めし、焙炉^{ほいろ}にかけて乾燥したもの）を製造し、その効用を宣伝したが、薬用として貴重品の域を出なかった。実際江戸時代末期に来日したタウンゼント・ハリスも、牛乳を飲んでいてから獣のように毛深いと言われている。

こうして一般には牛乳は飲まれず、明治に入り、牛乳飲用が勧められても、人々は牛乳を飲めば牛になってしまうなどと、嫌悪したのである。

そのため政府は、1871（明治4）年、明治天皇が毎日2度飲んでみせ、旧幕府の奥医師、後の初代軍医総監松本順が当時人気の女形俳優沢村田之助に吉原で牛乳を飲ませたりして牛乳の普及をはかったほどであった（東京都農業協同組合中央会、1996）。

第V章 料理という文化

1. 食材の選択

1) 文化による選択

本来人は犬肉も蛇肉も食べられる。ところが人は、生物学的には可食なものでも、どれは食べる、食べても良い、どれはいけななどと決めてしまい、自らにそれを刷り込み、それこそが人が食べるべきもので、それ以外は食べるべきものではない

いという分類を創り出してしまふ。人は動物であり、本来はその食性で食物が決まるはずであるが、人はそれを文化によって、ねじ曲げてしまふ。

2) ゲテモノ

さらには、こうして選択された食材以外のものを、他民族、他地方で食材とする選択をしていると、気味の悪いゲテモノという烙印を押し、排除しようとする。

2. そのまま食べられるものも料理する

1) 切る、加熱する

世界最高の料理の文化を持つといわれる中国人は、自然界の動物、植物を徹底的に集め、切り刻み、混ぜ、つぶし、強力な火力で加熱し、濃い味付けをし、素材を徹底的に改変しようとする。元々サラダのように野菜を生で食べることもなかったし、酒も茶も冷たいままでは飲まなかったというくらい、熱を加えることを重視する。したがって元来弁当を食べることはなく、香港では、日本のホカ弁の上陸でようやく弁当というものを食べるようになったほどである。

2) 刺身、踊り食いという料理

そういう民族から見れば、刺身などというものはほとんど料理とは思えないから、ゲテモノ扱いされるのだが、どの程度加工すれば料理したことになるのかは民族によって違ふ。

世界中で気味悪がられる刺身も、実は料理はされている。いくら新鮮なマグロ大好き日本人でも、海を泳ぐ生きたマグロにかじりついたりはない。漁獲し、衛生管理を徹底して、市場を通して商品として流通し、買われ、切り分け、皿に載せ、醤油やワサビという調味料をつけ、箸で食べる。加えて、新鮮に保ち、衛生的においしく食べるには様々な工夫がこらされている。

生肉を食べるイヌイットも、生きたカリブーにかぶりつくわけではなく、捕獲し、解体し、キャンプに保存し、ナイフで切り分けて食べる。

生きたままの魚を食べる踊り食いにしても、漁獲し、商品として流通し、調味料を加え、食器を

使って食べる。決して海中を泳いでいるのをそのまま飲み込むなどということはしない。

つまりどの民族でも、料理されないものを食べるのは気味が悪く、多かれ少なかれ、料理をして食べるというわけである。

第VI章 侵入する動物への嫌悪

1. 都市空間、生活空間のカオス化

1) 野生動物への嫌悪

動物たちが侵入してくると、動物たちは自らの縄張りを作り、食料獲得、敵の排除などを行なうから、都市空間、人の生活空間は、動物の、野性の秩序が支配する空間になってしまう。つまり人は自らの生活空間を統制することができなくなり、生存のための空間も資源も失い、生命をも脅かされることになる。

加えて動物たちの中には、人との境界自体を脅かすものもいる。たとえば東京のカラスは、身近に、至る所にいて、目の前の電柱に巣があったりする。都心のカラスとなると、ハイソな街白金台の緑地に住み、銀座に出勤。毎日半ドンで、庶民には無縁の高級料理を堪能し、午後は日比谷公園でのんびり。噴水池でカラスの行水までして白金台へご帰還というセレブ顔負けの暮らしぶりである。

巣の材料も洗濯ハンガーという金属製だから人の家と同じだが、とりわけ人と似ているのは、遊ぶこと。遊びというのは、生きていく上に不可欠ではない、いわば無駄な行為なので、遊ぶのは人だけと思われるが、実はカラスは、風に乗って飛ぶ風乗り遊び、木にぶら下がり揺れるぶら下がり遊び、そして線路の置き石遊びまでする。

知能も高く、胡桃の実を割るのに空中から落としたり、自動車教習所の教習車に轢かせたりする。教習所の車は走るのが遅いから胡桃がペチャンコにならないというわけだが、おまけに、教習所のコースの中でも、内輪差があり一番踏まれやすいカーブ地点に胡桃を置くというのだから、大変なIQである。

さらにカラスは、小さい時から育てれば、人の

言葉を学習し、話すようになる。オウム返しばかりではなく、ある程度意味を読み取った応答もする (NHK, 1996)。

このように、侵入してきたカラスは、人と同じ生活空間で、人とあまりにも似た生活をし、言葉まで話すわけで、あまりにも人に近過ぎる。これでは、野性の支配する自然の空間との境界が曖昧になってしまうだけでなく、人と動物の境界さえも曖昧になり、人のアイデンティティさえも脅かすことになってしまう。

2) 犬への嫌悪

1989 (平成元) 年から翌年にかけて小中学生の間で人面犬の都市伝説が広まった。深夜の高速道路では時速 100 キロで車に追いつき、追い抜かれた車は事故を起こすというのだが、顔は文字通り人で、言葉も喋る。ホームレスのように繁華街でゴミ箱を漁っていて、声を掛けると「ほっといてくれ」と立ち去る、などと噂された。そして何より恐ろしがられたのは、この人面犬に噛まれた人は人面犬になってしまうとされた点だ。

犬は本来野生狼だが、人がペット化して都市空間や生活空間に連れてきた動物で、人にあまりに密着し、あまりにも人に近づいてしまった。名前を持って個体識別され、食性から生殖まで、人と同様に、文化によって統制される。こうなると人との境界が曖昧化してしまう。おまけにもともと野生動物であるから、時に野性をむき出しにする。

そうした人と動物、山野と都市、生活空間の境界を曖昧にする動物への恐れが、こうした都市伝説を生み出すのである。

3) 猫への嫌悪

飼い猫といっても、いったん家を出れば、人には見えない猫道を通り神出鬼没、ひそかに集まり猫の集會と、どこで何をしているのか皆目わからない。もしかすると、映画「猫の恩返し」に描かれたように、街の隙間の猫道の向こうに、人と同じく言葉を話す猫たちの王国があるのでは……、どこへともなく消え、いつの間にか帰ってくる猫たちを見ていると、そんなこともありそうな気が

してくる。実に気味が悪い。

確かに犬も猫も、人類最良の友だ。知能が高く、感情表現が豊かで、人の喜怒哀楽を理解し、心が通じる。おまけに都市空間どころか家の中にまで入り、人と一緒に生活し、同じものを食べ、一緒に眠る。中にはブランド服を着せられ、美容院に通い、死後は霊園に葬られて法事などというお犬様、お猫様もいる。まさに人そっくりだ。

加えて、すぐそこ、人には見えないところに、自分たちの国を作っていたら、人の生活空間、都市空間はいつの間にか人の統制を離れ、野性の支配する空間になってしまう。こうした野性の侵入への恐怖が、犬、猫への嫌悪を生み出しているというわけである。

2. 身体空間に侵入する動物

1) 肉食嫌悪

誰でも当然自分は人だと思っている。しかしこれまで何頭の牛や豚を食べ、その食べた肉はどうなったのか、などと考えたらどうだろう。言うまでもなく自分の体になっている。すると自分の体の何%かは牛、何%かは豚、さらに何%かはマグロやアジ、イワシ、ということになる。確かにそうかもしれないが、そう言われると、自分は人なのか動物なのか良く分からなくなってしまう。

肉を食べるということは、文字通り自分の血肉となり一体化することだから、その動物の体と自分の体に連続性ができることになる。これでは自分が人なのか牛なのか、イワシなのか、不明確ということになってしまう。

明治の日本人は、牛肉どころか牛乳でさえ嫌悪した。確かに子牛が牛乳を飲んで牛になるのだから、人も牛乳を飲んだら牛になりかねない、と嫌悪するののもっともなことではある。

2) 植物食と肉食

何が可食か不可食かは各民族が独自に決めているが、動物と植物では圧倒的に動物食へのタブーが多い。実際ベジタリアンは多くいても、反対はほとんどいない。

人が、他の動物とは違う独自の存在であること

を確認する上で重大なのは動物である。植物は人とあまりに違うのに対して、動物は似ている。そんな自分たちと似た生き物を食べ、それが自分たちの血肉になったら、自分たち人とその動物の体に連続性ができてしまう。これは恐ろしいことで、それゆえ植物は強いタブーの対象にはならないのに対し、動物がタブーの対象になる、というわけである。

3) 犬肉、猫肉嫌悪

多くの民族で格別に強い食のタブーがあるのは、犬、猫である。現代日本人にとっても犬、猫を食べるなど想像を絶するほど気味が悪い。犬、猫も牛、豚も同じ哺乳類だし、人の消化器は当然犬、猫の肉も消化できる。知らずに食べたら吐き気などしない。しかし犬、猫は絶対に不可食とされる。

同じ生き物と言っても、ミドリムシ、ゾウリムシ、アメーバなどの原生動物はもとより、昆虫も人とは全く似ていない。魚も、姿形はもちろん、水中にいてヒレで泳いで卵を産むのだから似ていない。鳥や爬虫類、両生類となると、昆虫よりは似ているものの、まだまだ似ていない。ところが哺乳類となると似ている。姿形の違いはあるにしても、何しろ子どもを産んで、母乳で育てるのだから、そっくりである。

その哺乳類の中でも、生物学的にはともかく、多くの民族にとって、文化的、心理的に人ともっとも近いのは、人類最良の友の犬、猫である。彼らは人ではないが家族同然とされる。つまり人と動物の境界線上にいる実に曖昧な生き物である。これを食べたのでは、人と動物の境界が消滅しかねない。したがって食べてはいけないと決めてしまったのである。

4) 猿肉への嫌悪

生物学的知識が無い民族にとっても、やはり一番人に近いと思えるのは猿だ。類人猿となればなおさらだ。チンパンジーとヒトのDNAはいくらも変わらないなどといわれるが、そんな知識は無くても、まさに人と動物の境界線上にいる、ものすごく曖昧な存在だということは一目瞭然だ。こん

なもの食べてしまったら、食べた人は人なのか猿なのか、つまり人なのか動物なのかわからなくなる。だから多くの民族は猿を食べることを嫌悪する、とうわけである。

第七章 侵入する動物の力

1. 野生動物、家畜の力

1) カラス

こうして嫌悪され、排除され、統制される野生動物が、他方では、人に益を与えてくれる力を持つともされてきた。

たとえば嫌われ者の代表のカラスも、他方で神使とする信仰が、伊勢、熊野、祇園、三嶋、厳島、住吉、諏訪など各地の神社にある。

東京都府中市の大国魂神社では7月20日にすもも祭がおこなわれる。源頼義、義家父子が、奥州安倍氏平定（前9年の役）の際に戦勝祈願して戦に勝った御礼詣りをきっかけに始まったもので、神饌の一つに李子が供えられ、すもも市がたつようになったのが、名前の由来である。当日神社では五穀豊穰、悪疫防除、厄除の信仰をもつ「からす団扇」「からす扇子」が頒布される。カラスは山の神の使いであり、この扇で扇ぐと、農作物の害虫は駆除され、病人は直ちに平癒し、玄関先に飾ると魔を祓いその家に幸福が訪れるといわれる。

他にも、関東では正月11日に「鳥勸請」といって、カラスに餅を投げ付ける行事がある。また、カラスが畑の中3か所に置いた米のいずれをついばむかによって、その年に播くべき稲の早、中、晩3種の豊凶を占う行事もある。

近畿や中国では、旧三月のハルゴトの日に、カラスの食物を、木の枝や屋根に上げる風習がある。カラスが山の神の使であるとされるからである。

カラスは祥瑞とされ、『延喜式』、青鳥、赤鳥、三足鳥が上瑞、白鳥、蒼鳥、翠鳥が中瑞としているが、三本足の八咫鳥は『古事記』『日本書紀』の神武天皇東征の記事にも鳥神として登場する。『山城国風土記』『新撰姓氏録』『古語拾遺』などによれば、賀茂県主の祖の賀茂建角身命の化身で、東征の際熊野山中で険路に苦しめられた神武天皇

を大和まで道案内したという。

その後も『古事記』によれば、宇陀の兄宇迦斯、弟宇迦斯のもとに帰順を勧めに遣わされ、兄は矢を射て追い返したが、弟は勧告に従った。『日本書紀』には、兄磯城、弟磯城の家に派遣され「天神の子、汝を召す、いざわ、いざわ」と鳴き、兄は矢で追い返したが、弟は歓待し帰順したなどという話が記されている。

このように神の使い、戦陣で危急を救うといった話が伝えられ、カラスは人を救う神秘的な力を持つと考えられてきた。そして現代でも、八咫鳥がサッカー日本代表のシンボルマークとされていることは、よく知られている。

2) 猿

港区赤坂の日枝神社は、東京の総氏神、産神とされているが、武蔵野開拓の祖神、江戸の守護神として江戸氏が祀った山王宮に始まり、太田道灌が江戸鎮護の神として川越山王社を勧請し、さらには徳川家康が江戸城内鎮守の社、徳川歴朝の産神として以来、江戸の総氏神、江戸の産神として崇敬されている神社である。ここに祀られているのは、平安京の鬼門を守る日吉大社（大津市）の神獣、神使といわれる神猿の像で、夫婦円満、殖産繁栄のご利益があるとされている。江戸時代、江戸三大祭の一つ山王祭の先頭を進んだのも、猿のついた山車で、災難が去ると縁起を担いだものである。

なお、神田祭では鶏がついていたが、これも福を「取る」という縁起をかついだものとされる。

3) 狸

千代田区神田の柳森神社境内の福寿社は「お狸さん」と呼ばれるが、桂昌院が崇敬、城内から市中に移したもので、ここで授ける土製の親子狸像は、「他を抜いて」出世する「たぬき」と現在も信仰されている。

4) 狐

江戸の街には、「伊勢屋稲荷に犬の糞」と言われるほど、稲荷が多かったが、実は狐は、稲荷神

の使者、田の神の使令ともみなされ、狐が種もみをも日本にもたらしたという伝説もあって、信仰されてきた。また狐の挙動にはさまざまな神秘性を感じさせるものがあり、遠鳴きすると異変があるとか、コンコン鳴くのは吉兆、ギャーギャー、カイカイなどと鳴くのは凶兆とか、逆に鳴き声を聞くと不吉なことが起こるといったように、狐には変事を予知する力があるとされていた。

狐憑きという憑き物信仰もあり、狐持ちの家は霊力を持つ狐を飼っているから栄えるといわれ、狐の霊力の加護を受けていることを誇りとしていた。

5) 馬

穴八幡（新宿区）の流鏑馬は1728（享保13）年徳川吉宗が世嗣の痘瘡平癒を祈願して執行したのが始めて、あくまで神事として行われたものである。

馬は古くは神の乗り物として神聖視され、祈願や、神祭に神の降臨を求めて生馬を献上する風があった。後に土馬、木馬などの馬形を献上するようになり、さらに簡略化されたのが現在も各所に見られる絵馬である。

2. 犬、猫の力

1) 犬

歴代天皇即位後最初の新嘗祭に伴う節会（大嘗会）には隼人が宮中に伺候し、狗吠して皇居を守護した。これは狗吠、吠声が悪霊を追い払う神秘的力を持つと考えられたからである。

山犬（日本狼）は、三峯神社（埼玉県秩父郡）、山住神社（静岡県磐田郡）で使令とされている。

鳥枢洪摩明王は、不浄諸悪を禊ぎする効能を持つとされ、菩薩が悟りを開く為の修行中に諸悪からの防御の役割をし、密教寺院では、「鳥鷲沙摩變成男子法」という、妊娠中の胎児が女でも男に変えられる呪術が行われてきた。南方熊楠はこの鳥枢洪摩明王は犬を化体したものだといひ、犬に跨っている場合もある。日本人が犬の糞を毛嫌いしなかったのも、この信仰心からであるともいう。

民間でも、妊娠した場合五ヶ月目の戌の日に締める岩田帯に犬の字や絵を書いたり、宮参りなど

誕生後初めて生児が外出するときに、額へ鍋墨や紅で犬の字を書いて魔除けにするという風習も各地にあるが、これも安産できると信じられているからである。さらには犬をかたどった郷土玩具の「犬張り子」も、寝室に置いて幼児を守る魔除けとされている。

2) 猫の報恩伝説

回向院（墨田区）の境内には、1816（文化13）年に建てられた猫の報恩伝説で知られる猫塚があるが、いくつかの話が伝えられている。

日本橋の半次郎という男は大変貧しく、猫に向かって嘆いたところ、夜更けに猫が小判をくわえて帰ってきて、それ以後運が開け、猫の死後、回向院に立派な墓、猫塚を作ったという。

小判をくわえてきた猫はほかにもいた。文化年間（1804～1817）両国米沢町の魚屋利兵衛は、得意先の日本橋の両替屋、時田喜三郎の店のトラ猫をかわいがり、魚を与えていた。金もなく独り者の利兵衛が病に寝込んだ際、小判が転がってきた。その小判は親切にしてくれた利兵衛を助けようと時田の飼い猫が主人の小判を盗んできたものだった。猫は気味が悪い化け猫と切り殺されていたため、後に商売で成功した利兵衛が回向院に猫塚を立てて弔った。

猫は主人を金持ちにし、さらに仇討ちもしている。八丁堀の魚屋の定は博奕打ちで、貧しかった。蕎麦屋の主人が魚を盗んだ大きな黒い雄猫を滅多打ちにしているのを見て、猫を貰い受けた。その猫はサイコロの目を当てて鳴き声で教えたため、定はもうけまくった。しかし女房と浮気した間男に殺されてしまう。ところが黒猫はその男と女房ののどを食いちぎって殺し、自分も死んでしまった。恩ある主人の仇を討った猫をたたえて、奉行が回向院に猫塚を建てたといわれる。

なお現代にも猫が現金を拾ってきた実話があり、1996（平成8）年5月6日埼玉県幸手市で、雄の飼い猫ベルが16万円が入ったポリ袋をくわえて戻ってきて、話題になっている。

3) 猫檀家

猫は寺にも恩返しをしている。食えなくなった貧乏寺の和尚が飼い猫に暇を出した。すると猫は、呪力を用いて長者の家の葬儀で棺桶を舞い上がらせ、主人だった和尚の読経で降ろしてみせた。これによって和尚の名声が高まり、寺が栄えたという。これも「猫は死体を盗む」「老いた猫は火車に化けて葬儀を襲い、亡骸を奪う」といった猫への嫌悪が背景にある昔話である。

4) 人命を助ける猫

自性院（新宿区）の本尊は、節分のみ開帳される秘仏「猫地藏尊」である。1477（文明9）年頃、江古田ヶ原で、豊嶋城（練馬城）主豊嶋佐五門尉と太田道灌が合戦、日が暮れて道に迷った道灌の前に1匹の黒猫があらわれ、道灌を自性院に案内、道灌はそこで一夜を明かすことができたために危難を免れ大勝利を得た。これはすべて黒猫のおかげと大切に養い、死後丁重に葬った上、地藏尊を造って盛大な供養をし、自性院に奉納した。これが猫地藏尊である。

浅草今戸焼の招き猫は、両国の女郎屋金猫銀猫の店頭に置かれた金銀の猫に始まり、客を呼び込み福を招くという縁起物で、今日でも花柳界、飲食店にとどまらず、さまざまな店に置かれている。

招き猫発祥の地とされる^{だいけいざん}大谿山豪徳寺（世田谷区）の由来には、寺の繁栄に関して「全く猫の恩に報い福を招き寄駕の靈験によるものにしてこの寺を猫寺と呼ぶに至れり」とある。すなわち、彦根藩二代目藩主井伊直孝が、鷹狩りの帰りに夕立に見舞われた。雨宿り場所を探し困っているところに、豪徳寺の前で寺の飼い猫が手招きするような仕草をしていた。そこで寺で雨宿りしながら説法を聞いていると、轟音と共に稲光が光り、今しがた通ったばかりの道に雷が落ちた。猫のおかげで命拾いしたと直孝は寺の再建を約束。これが縁で、豪徳寺は井伊家の菩提寺となった。この猫にちなんで、片手をあげた猫の像を造ったところ人気を呼んだのが、招福猫児だといひ、豪徳寺では招猫観音（招福観世音菩薩、招福猫児はその眷属）を祀る招猫殿がある。

ゆるキャラブームの先駆けて人気の高い彦根のひこにゃんは、この招き猫と、井伊軍団の兜を合体させたキャラクターである。

吉原遊郭の投げ込み寺で浅草日本堤にあった西方寺（現所在地豊島区西巣鴨）には、花魁薄雲太夫の命を守った猫を供養する猫塚がある。太夫が厠に行こうとすると、猫が太夫の着物の裾をつかんで離さなかった。その時の猫が、あまりにも恐ろしい形相だったので、恐ろしくなった太夫が助けを呼ぶと、駆けつけた楼主はすぐさま脇差を抜いて猫の首を切り落としてしまった。すると猫の首が厠の下に飛んでいき、そこに隠れていた大蛇に食らい付き、見事噛み殺したという。これを悔み、太夫は西方寺に猫塚を作り、招き猫の像を祀ったと言われる。

5) 福猫

もっとも有名な福猫は夏目漱石の「名前はまだ無い」猫で、この猫をモデルに書いた『吾輩は猫である』によって漱石は文豪として名を残すことになった。

この雄猫は、子猫の時から凶々しく、貧しかった夏目家に入り込んでいたが、出入りの按摩が、「この猫は足の爪の先まで黒うございますから、珍しい福猫でございますよ。飼っておおきになるとお家が繁盛いたします」と言ったために、福が飛び込んできたと喜ばれ、飼い猫の座を手にした。1908（明治41）年に死んだ際は、漱石は「辱知猫義久く病気の処、療養不相叶、昨夜いつの間にか裏の物置のヘツツイの上にて逝去致候。埋葬の義は車屋をたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行仕候。但主人『三四郎』執筆中につき御会葬には及び不申候」という死亡通知を出した。庭に墓も作り、命日の9月13日には毎年弟子たちを集め猫の法事を営んでいた。鏡子未亡人は、猫嫌いながら、足の爪の黒い猫を終生飼いつづけ、さらに漱石自身の13回忌には九重の塔を建てた。これは漱石公園（新宿区）となった今日も猫塚として残されている。

3. 動物食の力

1) 肉食 薬食

江戸庶民は四足をほとんど食べなかったのに対し、將軍、大名は狩猟を行い、肉食していた。彦根藩では、元禄の頃から、牛肉の味噌漬けを毎年幕府に献上していた。薬食という名目だったが、一橋慶喜は豚肉愛好家で、豚一さんとあだ名されていたほどである。

大名は洋犬、巨大な猛犬、珍獣を飼うことにより、人を畏怖させ、自らの力を見せつけようとしたが（塚本、1995）、薬食の場合は、嫌悪すべき獣の肉に、特別な、大きな力が込められ、それを食べることによって、その力を取り込むことができると考えたからでもある。

幕末になると、一般庶民も薬食として肉を食べるようになり、1832（天保3）年の寺門静軒『江戸繁昌記』には、猪、鹿、熊、兎等の肉鍋を食わせる薬食店が江戸市中に数え切れないほど増えたと書かれているが、これも獣肉に特別な力があるとされたからである。

牛鍋は病気に効くといわれ、服部誠一は、『東京新繁盛記』に牛鍋の効能を、頑固な病気も一鍋食べれば元気が出て、十鍋も食べるとまったく直ってしまう、と書いている。また1867（慶応3）年、芝露月町（港区）に開店した牛鍋店中川は、健康に良いと御養生牛肉と宣伝したが、これも主人中川嘉兵衛が福沢諭吉から、牛肉は文明開化の栄養食として世の開けるに従い誰でも食べるようになると聞かされたからで、「けだもの屋敷医者ほどは口をきき」などと言われた。

1872（明治5）年に明治天皇が初めて牛肉を試食したこともあって、庶民の間でも野獣肉だけでなく、牛、豚等、家畜肉がかなり食べられるようになったのである。

2) 牛乳

嫌悪されていた牛乳も、明治に入り、文明開化の事業として築地に官営牛馬商社が設立され、以後松方正義、山県有朋、といった士族、大官貴顕でも乗り出す者が続出した（渡辺、1988）。1882

(明治15)年ころからは牛乳ブームとなり、牛乳を飲むことこそ文明人という風潮になった。

ただしここでも注目すべきは、牛乳が体位向上、健康増進に役立つと考えられたことはともかく、子どものときから牛乳を飲ませれば根気がある人になるとか、牛乳を飲まないで病気が治らないといった、およそ合理的とは思えない理由があげられていたことである。実際1904(明治37)年、時事新報は、102歳の東京の最高齢者を紹介し、米飯は1食1碗のみで、1日牛乳3合、牛肉を主食としていると紹介した(渡辺, 1988)。

おわりに

1. 動物の排除

人は弱い動物であり、野生の動物、自然が支配する空間の中では生きていけない。食料も生活空間も奪われ、猛獣には命を脅かされる。だから人は、自らの生活空間、都市空間を確保し、そこから自然を排除し、自らの文化によって統制された空間を確保しようとする。

それゆえ都市化の進展は、自然の統制の強化のプロセスでもある。中世のヨーロッパでは、豚の群れが都市空間をのし歩くといった状況であったし、かつては日本の都市においても鳶、カラス、野良犬、野良猫など、家畜、ペット以外の動物が生息していた。ところが都市化とともに、そして大都市であるほどに、こうした動物たちは、豚、鼠は勿論、野良犬、野良猫さえも排除され、ペットか、動物園の展示用以外の存在は認められなくなってきた。

そうして人は自然を排除し、文化により統制した空間として都市空間、生活空間を確保してきたのであり、基本的に人とは自然を嫌悪する動物なのである。

2. 動物の導入

人は自然、動物を排除しないと生きていくことができないが、しかし他方で、都市、生活空間の内部で人々が生きて行くためには、外部の自然の支配する空間から植物、動物などを導入する必要

がある。問題はこうした動物をそのまま無統制に導入したならば、都市空間と、自然の支配する空間の境界が不明確化してしまうということである。それゆえ人は、文化によって定められた方法によって統制して導入しようとする。これがペット化、家畜化であり、牛を乳牛に、狼をポチ、山猫をタマにして野性を排除し、都市に、生活空間に入れるのである。

つまり都市空間とは、一方で文化による統制の貫徹した空間として確保されようとし、他方でそれを阻害する自然を導入しなければならない、相矛盾する空間なのである。

3. 嫌悪というレッテル

しかしながら、いくら排除、統制しようとも、都市空間にも、生活空間にも、外の自然の支配する空間から動物たちが侵入してくる。

こうした侵入動物はまさに境界を曖昧にする危険な、排除すべき存在である。それゆえ、山野に生息する猿、狸、狐などが侵入するとまさに「変」な「事件」であり、気味が悪い、嫌悪すべきこととされるのである。さらにカラス、鼠、ゴキブリなどの場合は、都市空間、生活空間、家の中にまで住み着き、人にあまりに近いところにいながら、ほとんど統制できないから、さらに気味が悪い。カラスのように、すぐそこにいて、統制不能で、おまけに人の言葉まで話すとなると、どうしようもなく気味が悪く、まさに嫌悪されるのである。

また、家畜、ペットのように、文化の統制を受けて都市空間に導入された動物も、あまりに人の生活空間に入り込み過ぎ、人と近くなり過ぎると、嫌悪の対象となる。一番人の近くにまで入り込みながら、野性を失わない猫が、強い嫌悪の対象となるのもそのためである。

こうした「変」、「気味が悪い」、といった嫌悪は、自然が嫌いな動物である人が、自然、野性の空間と、都市、生活空間との境界、そして人と動物の境界を明確にするために作り出した、排除のためのレッテルというわけである。

4. 身体空間と動物

生物としての人は、空間の中に自らの身体が一定の面積、体積を占めることによって存在することが可能になる。それゆえ、身体空間と外部空間の境界を明確化することは、動物として生きていく上でも、自らのアイデンティティを確認するためにも、もっとも重要である。それゆえ、身体内部、外部空間の境界を曖昧にするもの、すなわち、身体から外部に出てくるものに対しては、ことごとく不潔、汚いといった嫌悪の評価を与え、排除することによって、境界明確化をはかろうとする。

しかし他方で、身体空間には、外から空気、水、そして食物を取り入れないと、生存していくことができない。ところが人の食べる食物はほとんどが動植物、すなわち他の生物の身体である。動物を食べることは、人の身体と動物の身体の間で連続性ができてしまうことであり、自然の空間と自らの身体の境界を不明確化することになる。したがって食べることは基本的にきわめて危険な行為ということになる。

そこで作り出されたのが料理という文化であり、人の動物としての食性とは別に、文化により可食、不可食を決め、可食としたものだけが食べるべきものとされ、不可食のものはゲテモノという嫌悪のレッテルを貼られる。中でも、犬、猫、猿のように、人に近いものほど強い嫌悪の対象となる。

またたとえナマでそのまま食べられるものであっても、なんらかの形で加工が行なわれる。刺身も、ナマ魚を食べるといっても、海を泳ぐ生きた魚に直接かぶりつくわけではない。料理とは、海、川、山などの空間から特定の動物を収穫し、命を奪い、商品、食品として流通過程を通過させ、それをさらに、切り分け、混ぜ、加熱、調味し、盛り付け、食器を用いてマナーに則って食べる、という手続きである。自然の支配する空間から、都市空間へと移動させるだけでなく、決められた通りに手を加え、文化が統制したものとして改変し、もはや動物ではなく、たとえば豚をトンカツにして身体に導入することなのである。

そうした手続きを経ない動物が身体に入ること

は、きわめて危険なことであり、野蛮な、気味が悪いこととして嫌悪される。したがってここでも、気味が悪い、嫌悪というのは、自然を嫌悪する人と言う動物が、自然と身体との境界を明確化するために作り出したレッテルというわけである。

5. 人とカオス、コスモス

メアリ・ダグラスは、もとはカオスであるような現実世界を分類的で整合的な認識体系のうちに捉える際に、分類の網目からこぼれ落ちる境界上の余剰部分を、両義的ゆえに汚れたものとして捉えることは人間の思考において一般的であるという。

人は動物、植物などが支配する自然の空間の中では生きていけないから、それらを嫌悪し、排除した生活空間を確保しようとする。さらに人は、自ら理解しがたい、その中で生きていくことが困難なカオスを恐れる。それゆえ、本来カオスである地上の空間を、自らの文化により統制する空間と、自然が支配し人が統制できない空間との間に境界を設定して分類し、一つのコスモスとして認識しようとする。同様に、自らの身体に関しても、その外の空間との間に境界を設定しようとする。

こうした分類的で整合的な認識体系のうちに捉えるために作り出されたのが、嫌悪というレッテルであり、そこにおいてレッテルを貼り付けられた動物たちは、山野と都市空間、生活空間、身体といった分類を曖昧にする困った存在でもあるが、基本的カテゴリーの対立を仲介し、明確化しており、いわばトリックスターの役割を与えられているとも言うことができよう。

6. 人とカオスの力

ダグラスはまた、汚れたものとして嫌悪したものを排除するときには、それによって暗に排除されるものに備わっている脅かす力を認めているともいう。

これまで見てきた例でも、カラスも狐も猿も一方で嫌悪されながら他方で神の使いであり、犬、猫といった人が導入した動物たちも含めて、特別な力を持つと考えられていた。

これは肉食が身体に特別な力をもたらすとした例も同様である。

人とは、コスモスを求め、カオスを嫌悪する。その生活空間においても、身体空間においても、一方で自ら統制できない自然、自然の支配するカオスの空間を嫌悪、排除する。しかし他方で、カオスの空間から自然を導入し、その力に頼って生きていく。

人の、こうした自然、動物に対する矛盾した姿は、まさにカオス、自然の中では生きていくことができない人という弱い動物の生き方を反映したものであるといえよう。

参考文献

- 朝日新聞, 1996年2月3日
 朝日新聞, 2010年11月6日
 メアリ・ダグラス, 2009, 『汚穢と禁忌』, 塚本利明訳, 筑摩書房
 郷田洋文, 1952, 「牛聞書」, 『民間伝承』16巻2号, 日本民俗学会
 半藤末利子, 2008, 『夏目家の福猫』, 新潮社
 服部誠一, 1992, 『東京新繁昌記』, 大空社
 ラフカディオ・ハーン, 1994, 『怪談』完訳, 船木裕訳, 筑摩書房
 石森秀三, 1988, 『都市のフォークロア』, 現代日本文化における伝統と変容4, 井上忠司編, ドメス出版
 唐沢孝一, 1997, 『都市の鳥類図鑑』, 中央公論社
 笠井俊彌, 1995, 『犬の落としもの万華鏡』, 中央公論

社

- 松浦静山, 1978, 『甲子夜話』, 徳間書店
 南方熊楠, 1921, 「民族短信民俗談片」, 『民族と歴史』6巻5号, 日本学術普及会
 宮元健次, 2001, 『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』, 人文書院
 NHK, 『都会のカラス』1996年5月6日
 野村純一, 2005, 『江戸東京の噂話「こんな晩」から「口裂け女」まで』, 大修館書店
 佐々木洋, 1995, 『都市動物たちの事件簿』, NTT出版
 田中 聡, 1999, 『伝説探訪東京妖怪地図』, 祥伝社
 谷口研語, 2000, 『犬の日本史 — 人間とともに歩んだ1万年の物語』, PHP 研究所
 寺門静軒, 1972, 『江戸繁昌記』, 三崎書房
 東京都農業協同組合中央会, 1996, 『江戸・東京暮らしを支えた動物たち』, 東京都農業協同組合中央会
 豊島区立郷土資料館, 1990, 『ミルク色の残像 — 東京の牧場展 —』, 豊島区立郷土資料館
 塚本学, 1995, 『江戸時代人と動物』, 日本エディタースクール出版部
 渡辺善次郎, 1988, 『巨大都市江戸が和食をつくった』, 農山漁村文化協会
 山川三太, 1998, 『文化人類学通になる本 人間とは実に奇妙な動物である』, オーエス出版
 柳田國男, 1970, 「狸とデモノロジー」, 『柳田國男集』第二十二巻, 筑摩書房
 読売新聞, 1963年7月1日
 吉田禎吾, 1976, 『魔性の文化誌』, 研究社
 日枝神社ホームページ <http://www.hiejinja.net/index.html>
 大國魂神社ホームページ <http://www.ookunitamajinja.or.jp/>